

## 日本における青年期後期の友人関係研究について

難波 久美子<sup>1)</sup>

近年、日本では青年期の延長が指摘されている。特に、青年期の終了時期が後にずれ込んでいるとの指摘がなされている(遠藤, 2000)。青年期の終了の指標として、経済的な自立や結婚とする(加藤, 1997)ことについては、大方一致するようである。では、どのくらい延びているのだろうか。

まず経済的な自立について、2003年度の就職と離職の現状をみると、高等学校卒業者のうち就職希望者に対する就職率<sup>2)</sup>は95.9%、大学卒業者のうち就職希望者に対する就職率<sup>3)</sup>は93.1%となっている。ところが、2003年の年齢別離職率<sup>4)</sup>が、19歳以下で44.9%、20~24歳で24.9%、25~29歳で18.9%、30~34歳で14.2%と発表されている。30歳代後半から50歳代が11%前後の離職率であることと比較すると、若年層の離職率の高さが分かる。また、近年では、就職しても親との同居を続ける人口が増加していると言われている。例えば、2003年版の厚生労働白書<sup>5)</sup>によると、90年代後半には、男女とも親と同居する20歳代の割合が50%後半の数値を示しており、バラサイト・シングルという言葉が示すように、多くの若者が経済的にあるいは生活上、完全に親から独立していないと考えられる。さらに、厚生労働省が職探しさえしない若者(NEET; Not in Employment, Education or Training)の増加を指摘し、対策に乗り出している。これらを併せて考えると、ある程度安定した就業状態となるのは30歳前後といえるだろう。

青年期終了のもう一つの指標として取り上げられる結婚については、厚生労働省の発表<sup>6)</sup>によると、2003年における婚姻件数は757,331組で、平均初婚年齢が、夫29.4歳、妻27.6歳となっており、晩婚化が進行している。一方で、別居したときの夫妻の年齢階級別にみた離婚件数<sup>7)</sup>は、2002年で男女とも30~34歳の年齢階級で最も高く(男性30~34歳で44,571件、女性30~34歳で49,227件)、その前後の年齢階級が次いで高い値となっている。同居期間別にみた離婚件数<sup>8)</sup>は、5年未満の離婚が離婚件数全体の約3分の1(96,840件)を占めている。さらに、離婚に関する統計<sup>9)</sup>によると、20歳代の有配偶離婚率が男女とも1985年から1995年で約2倍近い増

青年期終了のもう一つの指標として取り上げられる結婚については、厚生労働省の発表<sup>6)</sup>によると、2003年における婚姻件数は757,331組で、平均初婚年齢が、夫29.4歳、妻27.6歳となっており、晩婚化が進行している。一方で、別居したときの夫妻の年齢階級別にみた離婚件数<sup>7)</sup>は、2002年で男女とも30~34歳の年齢階級で最も高く(男性30~34歳で44,571件、女性30~34歳で49,227件)、その前後の年齢階級が次いで高い値となっている。同居期間別にみた離婚件数<sup>8)</sup>は、5年未満の離婚が離婚件数全体の約3分の1(96,840件)を占めている。さらに、離婚に関する統計<sup>9)</sup>によると、20歳代の有配偶離婚率が男女とも1985年から1995年で約2倍近い増

- 1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院研究生
- 2) 厚生労働省 平成16年3月新規学卒者(高校・中学)の職業紹介状況 (<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/09/h0909-1.html>; 2004年9月15日現在)
- 3) 文部科学省 平成15年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業者の就職状況調査(4月1日現在)について ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/16/05/04051103.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/05/04051103.htm); 2004年9月15日現在)
- 4) 厚生労働省 平成15年雇用動向調査結果の概況【結果の概要 3 離職者の状況 (1) 年齢階級別離職者の状況 表10 年齢階級別離職率】 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/doukou/03-2/hyou10.html>; 2004年9月15日現在)
- 5) 厚生労働省 厚生労働白書(平成15年版)【第1部 活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築 第2章 子どもをとりまく現状・課題 図表 2-1-22 諸外国の親と同居している者の割合(20歳代後半層)】 (<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/03/dl/1-2d.pdf>; 2004年9月15日現在)

- 6) 厚生労働省 平成15年人口動態統計月報年計(概数)の概況【4 婚姻】 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai03/marr.html>; 2004年9月15日現在)
- 7) 厚生労働省 平成14年人口動態統計【離婚 第3表 別居したときの夫妻の年齢階級別にみた離婚件数・構成割合】 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii02/divo3.html>; 2004年9月15日現在)
- 8) 厚生労働省 平成15年人口動態統計月報年計(概数)の概況【5 離婚】 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai03/divo.html>; 2004年9月15日現在)
- 9) 厚生労働省 離婚に関する統計【2 年齢別にみた離婚】 ([http://www1.mhlw.go.jp/toukei/rikon\\_8/repo2.html](http://www1.mhlw.go.jp/toukei/rikon_8/repo2.html); 2004年9月15日現在)

加を示しており、他の年代よりも急激な伸びであることが示されている。これらの統計から、近年晩婚化が進んでいると同時に、結婚していたとしても、20歳代の結婚生活が他の年代に比べて必ずしも安定していないと推測される。

これらを総合すると、就職や結婚状況から推測される現代の青年期の終わりは30歳前後ということになるだろう。青年期の開始を第2次性徴の発現とすると、近年の女子の初潮開始年齢が12歳前後（日野林・南・糸魚川, 1998）と指摘されていることから、現代の日本では20年近い時間が青年期に含まれることになる。もちろん、すべての人が20年間の青年期を過ごすわけではないが、「青年期」と括するには、あまりにも長い時間である。これまで、若者が所属する学校組織に対応させて、中学校年齢を青年期前期、高等学校年齢を青年期中期、大学等の高等教育年齢を青年期後期とする発達段階区分があった。このような区分は、学校組織に所属している若者を、ある程度の均一性をもって捉えることができたため、有効であったと思われる。しかし、20歳代の中盤から後半はほとんどの若者が学校組織から離れるため、このような若者を学校組織と対応させた青年期後期にまとめて扱うのは難しくなっているといえるだろう。

それでは、若者自身はどのような意識を持っているのであろうか。浦上・小平（2004）では、青年期後期にある若者が、「子どもでもあり、おとなでもある」存在であると自らを見なす傾向があることを指摘している。そして、「子ども」の程度、「おとな」の程度を評価する次元の第1因子として、「生きることの意味・価値を見出している」、「社会の中で自分の果たすべき役割をわかっている」といった社会に関する項目に負荷が高い「社会的な自己確立」が抽出された。この因子得点をもとに分析した結果、自分がおとなであると感じているほど、「社会的な自己確立」因子得点が高くなることが示されている。就職や結婚といった社会的な決断が遅くなっている現代では、この「社会的な自己確立」が遅くなっていると考えられよう。

これまでは、学生生活を終わると、就職や結婚をする事で大人の世界への仲間入りをするということが、同時期に急激に起こると考えられてきた。そのために成人期に入る前後では求められる役割のギャップが大きく、成人期前に習得した適応パターンのみで成人期以後の生活に適応していくというのは通常の場合は不可能（斎藤・菊池, 1990）とされてきた。だが現代では、急激におとなになる必要がなくなり、「社会的な自己確立」をゆっくりと行えるようになった。就職や結婚といったライフイベントが、ばらばらにゆっくりと体験されるようになって

きたとも考えられるだろう。そのため、学校という守られた場所から出て、社会の中で成人へのライフイベントを順に体験している若者は、「子ども」と「おとな」の入り混じっている青年期（後期）から、徐々に「おとな」の割合が徐々に増していく成人期への過渡期にあると捉えられるだろう（以下、過渡期と表記する）。これまでの青年心理学では、主に学校組織に所属する若者を対象にしてきたが、30歳まで青年期が延長された現状を把握するためには、過渡期にある学校組織を離れた若者も対象として捉える必要があるといえよう。

このような過渡期にある若者に注目し検討する上で、対人関係、特に友人関係は重要な切り口になるだろう。それは、学校を離れることで、友人の意味に変化が起ると考えられるからである。つまり、学校内では同年代ばかりの空間で過ごすことになるが、学校を離れると、様々な年代の人々と接することになり、友人＝仲の良い人という簡単な図式では説明できなくなると考えられる。よって、友人関係のあり方や本人にとっての意義の変化を検討することで、過渡期の特徴の1側面を検討できると思われる。そこでまず、青年期を対象としたこれまでの友人関係研究について整理してみたい。これらを概観し、過渡期を検討するために必要な視点を検討することが本稿の目的である。そのためにまず、これまでにテキストで紹介されている青年期の友人像をまとめる。次にこれまで行われてきた青年期の友人関係研究を概観し、対象としてきた関係性を明らかにする。その上で、過渡期の友人関係を探索する上で必要な視点の提案を行いたい。

## 1. 青年期の友人像

青年期における友人関係の特徴として、親友の出現が挙げられる。児童期までのほぼ同年輩の相手との包括的な社会関係は仲間関係と呼ばれ、友人関係は仲間関係の一部として捉えられている。そして、より個人的で限定的な意味を持つ場合について、友人関係を用い、青年期には、仲間ではなく、友人としての結びつきが急増する、とされる（井上, 1992）。宮下（1995）は、乾（1977）の友人関係の発達段階を紹介し、その中でも、第4段階の「意思的友人関係」と第5段階の「人格的友人関係」が、青年期を特徴付ける重要な段階であるとしている。すなわち、「意思的友人関係」とは、具体的な1つの共同の目的的行動が中軸となって、友人関係ができる段階であり、「人格的友人関係」とは、自分の人生観・世界観に合った友人を求める段階である。これらの段階を経ることで、青年はいわゆる「親友」と呼ばれる関係を確立していく。児童期には友だちは一緒に遊ぶためのもの

であるが、青年期の親友関係は、自己開示、個人的な感情の共有が特徴である（遠藤，2000）。つまり、児童期までの遊びを中心とした仲間関係から、個人的で限定的な意味を持つ特定の友人が生まれる。そのような友人でも特に精神的に深いつながりを持つことができる対象が、いわゆる親友という関係となるといえるだろう。

それでは、このような親しい友人を持つことは、青年にとってどのような意義があるのだろうか。次の3点が主に指摘されている。すなわち、精神的な安定化、自己理解、人間関係を学ぶというものである（宮下，1995）。まず、精神的な安定化とは、主に両親との強い絆から離れることとの関連で説明される。身体的・知的に著しい発達をとげた青年は、「もう子どもではない、大人と対等なのだ」という意識が生じる（山岸，1990）。両親との深いアタッチメントは破壊され、それに伴い責任の感覚が増大することで、情緒的・社会的孤独感を感じやすくなる（遠藤，1997）。そのことが、親和欲求を高め、内面を共有できる友人は、「自分だけではない」という安心感（宮下，1995）と共に、その孤独感を癒してくれる存在となる（遠藤，1997）。青年にとって、同世代の友人は、親に代わる心の支えとして大切な存在となるのである（藤本，1999）。次に、自己理解は、自分を相対化する機会を提供されることで進んでいく。仲間はずれにあわないために、同じような服装をし、同じような関心を持ち、同じように振舞うことで、親とは異なる価値観を知っていく（遠藤，2000）。そのような中で、自分の長所や短所に気付かされ、自己を客観的に見つめ、内省する必要に迫られるのである（宮下，1995）。では、人間関係を学ぶということについてはどうだろうか。友人関係は、親子関係のように、相手が推し量り、調節してくれるような大人との関係とは異なる。友人関係では、楽しい事や嬉しい事ばかりではなく、辛いことやトラブルも起こる（宮下，1995）。また、友人関係は、甘えが許されない対等他者との関係であり、その立場からさまざまな評価が与えられる。そのため、どのようなことが許容され、どのようなことが拒絶されるのか考え、適切な行動をとらなければならない（遠藤，1997）。

このような、親友の大切さが強調される一方で、一部の現代青年は、異なる友人関係を持っているという指摘がなされている。それは、友人とは気軽に話せてお互い傷つき合うことがないような、距離を置いた関係（遠藤，1997）を持っているというものである。このような青年は、友人と一緒にいても別々のことをするなど、人間関係ネットワーク作りに積極でない。親友が不在であるという（遠藤，2000）。また、自己の内省力が育っていないという指摘もある（西平，1988）。

以上、青年期の友人関係は、親友と呼ばれるような親密な友人が出現し、この親友は青年の心的発達に関わる重要な存在であるということ（このような視点を、岡田（1999）は、「伝統的的青年観」と呼んでいる）によって特徴付けられている。そして、現代の友人関係の特徴として、そのような親友を持たない現代青年の存在が紹介されているといえるだろう。

## 2. テーマ・内容による、これまでの友人関係研究の分類

では次に、日本におけるこれまでの友人関係を扱った研究を、そのテーマ・内容から概観してみたい。1993年から2004年（8月現在）の約10年間に心理学研究、教育心理学研究、発達心理学研究、青年心理学研究に掲載された青年期を対象とした研究のうち、タイトルまたはキーワードに青年期の「友人」、「友達」が含まれるものを選出した<sup>10)</sup>。総数は34本あり、テーマ・内容から大きく3つのカテゴリに分類できる。①友人関係の発達の变化や、友人概念そのものについての研究（15本）、②友人関係が自己形成に与える影響や自己意識との関連についての研究（7本）、③友人関係を対人場面の1つとして取り上げている研究（12本）である。

①友人関係の様相やその発達の变化についての研究 友人関係が、長い青年期の中で、発達の友人との関係のあり方が変わっていくことを横断的にはあるが実証的に示した研究がある。例えば、落合・佐藤（1996）、長沼・落合（1998）は、友だちとのつきあい方に焦点をあて、中学生から大学生までを横断的に検討している。また、藤井（2001）は、青年が友人と適度な心理的距離を模索している点に注目し、青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマについて検討している。また、榎本（1999，2000）は、友人との関係を、外面的に見える活動的側面だけではなく、内面的な感情や欲求も併せて発達の变化を検討している。これらの研究は、実際に青年が持っている友人関係を捉え、発達の变化、関係を結ぶ対象となる人の変化やその変化に関わる要因を取り上げている。

②友人関係が自己形成に与える影響や自己意識との関連についての研究 友人関係が自己形成に与える影響や自己意識との関連について検討した研究には、例えば、岡田（1999）がある。ここでは、現実の友人との関わり方と理想の友人との関わり方、友人がとっているである

10) 「交友」も含めた。また、キーワードが英語の場合、friend(s), friendship(s), chumの含まれる論文を対象とした。

う関わり方という3種類の友人関係に関する評定と、自己意識との関連について検討されている。三好(2002)では、同性友人グループとの関わりの中での自己の個性のあり方について検討されている。他にも、吉岡(2001)では、友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から、友人関係の満足感について検討されている。これらの研究では、一般的な友人概念を想起させ、友人関係を測定する尺度に回答を求めた後、分析の際にいくつかの特徴で群を分け、群間で他の心理変数の比較検討をしたり、尺度の因子ごとで因子得点を求め、その得点を群間で比較したりしていた。尺度得点により得られた関係を解釈するとき、岡田の一連の研究(1993a, 1993bなど)で指摘されているような現代青年の内面的特徴に触れている場合もあった。

③友人関係を対人場面として取り上げている研究 注目する変数間の関係を検討するための、社会的な対人場面の1つとして、友人関係を取り上げている研究である。例えば、長峰(1999)では、仮想対人葛藤場面の1つに、また、黒田・桜井(2001)では、中学生にとっての重要な場面の1つとして友人関係場面が選ばれている。他にも、友人関係について検討することを目的としていないので、タイトルやキーワードに友人や友だちが入っていないが、対人ストレスや共感性といった対人関係場面で生じる現象を扱った研究で、友人関係場面がよく取り上げられている(例えば、橋本, 2000; 石川・内山, 2002)。

### 3. これまでの友人関係研究ではどのような関係性を抽出してきたのか

ところで、青年期の友人関係について扱っている上記の論文では、具体的にどのような関係性を扱っているのだろうか。各論文の方法から、対象とする関係性を指定している箇所(教示)を抜粋し、Table 1に示した。

①友人関係の様相やその発達的变化についての研究では、ほとんどの研究で、何らかの限定をつけていた。最もゆるやかな限定は、「同性の(落合・佐藤, 1996など)」、「異性の(岡本・上地, 1999)」という生物学的な制限であった。さらに「親しい(榎本, 1999など)」、「重要な(藤井, 2001)」、「信頼できる(水野, 2004)」など調査協力者にとっての心理的な意味によって少数に限定されているものがあつた。これらは、実際に調査対象者が持っている友人関係から一部を抽出してその特徴を検討しようとしていると考えられる。方法中に特に限定や指示のないものは、15本中3本であった。

②友人関係が自己形成に与える影響や自己意識との関連についての研究では、限定のついている研究は7本中1本で、「普段つきあっている仲間のうちで最も親し

い友達(岡田, 1999)」であった。他の研究は、全体的な友人関係を想起させるような「友達(小塩, 1998など)」、「友人(長尾, 1997など)」が多く、「友人や知人(金子, 1995)」、「友人グループ(三好, 2002)」といった複数の人間が含まれることを想定した表現が用いられている研究もあった。これらの中には、限定を設けず、友人概念の想起を調査協力者任せにすることによって、「どの友人を対象にしていかわからなかった」、「友人関係にはいろいろある」というような、友人関係を一括りに一般化することが難しいと調査協力者が感じていたことを報告している研究もあった(吉岡, 2001)。

③友人関係を対人場面として取り上げている研究では、社会的な場面の1つとして「友人場面」を扱う研究が多かった。これらの研究では、友人についての説明や教示のないものが多かった。これは、友人関係と親子関係と対比させる研究もあることから、友人関係をだまかに同輩関係として捉えているためと思われる。酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村(2002)や外山(2004)のように、回答の際想起する友人と、調査協力者の間に相互のやりとりがあることを強調する研究では、「親友」や「最も仲の良い」という表現が用いられているようであった。

以上、研究者の問い方から、友人関係について捉えようとしてきた対象が異なることが明らかになった。①は対象となる関係性を限定し、実際の友人関係の一部を具体的に想起させることで、調査協力者がその関係性をどのように捉え、行動しているのかを明らかにしてきたといえよう。また、②では、一般的な友人を想起させることで、調査対象者の内部にある友人概念を取り出し、他の自己概念との関連を検討していた。さらに、③では、実際の場面を想定するものの、やや広い関係性を対象とし、その場面内で起こっていることに主眼があつた。対象を限定して扱うのは、相互作用を強調する場合であった。

### 4. 過渡期の友人関係を捉えるための視点

1.では、青年期の友人関係における親友の重要性についてクローズアップされていることを示した。次に2.では、友人関係の扱い方によって3つの観点から先行研究を整理し、3.では、それぞれのカテゴリでは友人という関係性の何を抽出しようと試みられていたのか、教示文から検討した。これらを踏まえて、過渡期の友人関係を捉える視点について考えてみたい。

ところで、これまで行われてきた青年期の友人関係に関する研究は、青年期の友人の意義とある程度対応した視点から検討されているといえる。意義とは、精神的な安定化、自己理解、人間関係を学ぶこと(宮下, 1995)

Table 1 タイトルまたはキーワードに「友人」「友だち」が含まれる青年期を対象とした論文

(1994年から2004年(8月現在)までに公刊された心理学研究・教育心理学研究・発達心理学研究・青年心理学研究に掲載された論文を対象とした。カテゴリ内は刊行年順で、教示文は関係する箇所のみを抜粋または編集して記載し、友人や友達という表現箇所を下線を付した。)

著者名	刊行年	タイトル	教示で用いられている表現
安達	1994	青年における意味ある他者の研究	(6側面を提示し、当てはまる人を挙げさせ、上位の関係について検討している。そのため、教示で友人を指定していない)
上野・上瀬・松井・福富	1994	青年期の交友関係における同調と心理的距離	(項目中に、「仲間」,「皆」)
落合・佐藤	1996	青年期における友達とのつきあい方の発達の变化	小学校高学年から大学生に至るまでの同性の友達とのつきあい方について、自由記述;友達とつきあうときに自分が感じたり考えたりすることにどの程度あてはまるか
和田	1996	同性の友人関係期待と年齢・性・性別同一性との関連	同性友人との関係においてそのいずれを重要と考えるかを回答させた。
長沼・落合	1998	同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係	大学生(回想)小学校高学年から大学生に至るまでの <u>同性の友達とのつきあい方</u> について、「中学・高校・大学で、あなたはどのような友達つきあいをしていましたか。具体的に書いてください。」;自分の <u>友達とのつきあい方</u> にどの程度当てはまるか;自分の <u>友達とのつきあい方</u> に当てはまる程度
榎本	1999	青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化	「 <u>同性の親しい友人</u> 」。2名の友人を選んでもらい、そのそれぞれの友人について、「その友人とどのようなことをするのか」などを記述してもらった。;文章完成法により、「 <u>友人と一緒にいて楽しいと感じるときは……</u> 」,「 <u>友人と一緒にいて不安になるときは……</u> 」
岡本・上地	1999	第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係	父親・母親・ <u>同性友人</u> ・ <u>異性友人</u> の各々に対するイメージを問う;母親,父親, <u>最も親しい同性の友人</u> ,および <u>最も親しい異性の友人</u> について
榎本	2000	青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連	<u>同性の友人関係の中で「どのようなことに満足しているのか」,「どのようなことに不満を感じているのか」</u> を記述;榎本(1999), <u>同性の親しい友人</u> (「友人」とは、対象者が持っている友人一般、仲間(peer)という広い関係ではなく、本人が主観的に親しいと捉えている相互に影響しあい、比較的密接した友人のことである。)
藤井	2001	青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析	「 <u>同性の重要な友人との関係について、相手と近づきたい(離れたい)と思ったとき、どのように感じたり考えたりしますか。</u> 」という問いを行き詰まったこと・悩んだこと・不安なこと・息苦しいことなどについて尋ねた。その際、一人の相手との関係に特定して、時系列的に話してもらった。; <u>同性の重要な友人との関係を想定するように教示し、回答を求めた。</u>
柴橋	2001	青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち	友だちに対して、どのような場面で自分の気持ちや考えを表現することが難しかったか;相手が <u>同性の友だち</u> (男子では <u>男子の友だち</u> ,女子では <u>女子の友だち</u> )の時を思い浮かべて答えて下さい;(項目中に「友だち」)
和田	2001	性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響	大学入学以前からの <u>最も親しい友人</u> 1人(旧友人)と大学入学後に <u>最も親しくなった友人</u> 1人との関係について尋ねた。
藤野	2002	男子非行少年の交友関係の分析	①調査対象者に最近よく一緒にいる友人一人を思い浮かべさせ、その友人と一緒にいる理由について4件法で回答させた。
平井・高橋	2003	友だち関係における文化 —ジレンマ課題と友情概念の検討—	(課題場面中に、「親友」);「友情」の理解についての質問「親友と普通の友だちはどのように違うか?」、「どうすれば親友になれるか?」、「友人を信じることはどうして大切か?」、「親友はなぜ大切か?」

①友人関係の様相やその発達の变化についての研究

日本における青年期後期の友人関係研究について

② 友人関係が自己形成に与える影響や自己意識との関連についての研究

水野	2004	青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか — グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成 —	「信頼できる友人」に限定した。本研究の関心は一般的な友人関係ではなく、高木（1996）が言う信頼関係を築く対象としての個別の友人関係を青年がどのように認識しているか、にあったからである。但し、定義ではなく緩やかな限定にとどめたのは、「信頼できる友人」の定義そのものも青年の主体的な回答から立ち上げるためである。
金子	1995	青年期における他者との関係のしかたと自己同一性	あなたの友人や知人などまわりの人を思い浮かべて
岡田	1995	現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察	岡田（1993b）（項目中に「友達」、「グループ」）
長尾	1997	前思春期女子の chum 形成が自我発達に及ぼす影響— 展望法と回顧法を用いて —	次のような友人がいましたか（項目中に「友だち」）
小塩	1998	青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連	「普段友達とどのようなつき合い方をしているか」。また、本研究では、青年の全体的な友人関係を捉えるために、特定の他者を想定させない方式で調査を行った。
岡田	1999	現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について	普段つきあっている仲間のうちで最も親しい友達
吉岡	2001	友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感	あなたがこうあってほしい、こうでありたいと思う友達とのつきあい方はどのようなものですか。あなたの日頃の友だちづきあいについて、以下の質問にどのくらい当てはまりますか。あなたは今、友だちとのつきあい方にどのくらい満足していますか。
三好	2002	女子短大生の同性友人グループとの関わりにおける自己の個性のあり方— イメージ画を用いた検討 —	あなたは、これまでの学校生活で、一緒に教室移動したり、お昼ご飯を食べたりするような、決まった友人グループに属していたことがありますか？。あなたは、現在の学校生活で、上に述べたような友人グループがありますか？。あなたと「女の子の友人グループ」の関係を絵に表してみてください。絵はグループとあなたの関係をだいたい関係図で表してください。……；現在のグループ経験。これまでのグループでのトラブル経験。どんな人とグループになりたいか。

③ 友人関係を対人場面として取り上げている研究

福岡・橋本	1995	大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係	今回は、被験者自身の「家族」と「友人」について同じ項目を用い、両者からの入手可能性を個別に回答させた。なお本研究では、家族や友人の具体的内容（家族にきょうだいや祖父母を含めるか、友人に同性、異性を考慮するかなど）は特に指定せず、回答者自身の状況にまかせるものとした。
三浦・坂野	1996	中学生における心理的ストレスの継続的变化	「友人との関係」場面（項目中に「友達」「仲間外れ」）
福岡・橋本	1997	大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果	家族と友人をそれぞれ全体としてみた場合の各サポート行動の入手可能性を5件法で評定させた。
崔・新井	1998	ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係	（項目中に「友達」「友人」）
長峰	1999	青年の対人葛藤場面における交渉過程に関する研究— 対人交渉方略モデルを用いた父子・母子・友人関係での検討 —	仮想対人葛藤場面の一つとして、「友人場面」（例話中に「親しい友達」）
黒田・桜井	2001	中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係	（項目中に「友だち」）
小塩	2002	自己愛傾向によって青年を分類する試み— 対人関係と適応、友人によるイメージ評定からみた特徴 —	（最も親しい同性同年輩の友人1名に各自のイメージを評定させるよう求めた。）
酒井・菅原・眞築城・菅原・北村	2002	中学生の親および親友との信頼関係と学校適応	（親友の有無を確認する項目）「秘密を話すことができる親友がいる」、「自分と同じ立場になって物事を考えてくれる親友がいる」、「個人的なことを分かち合える親密な友達がいる」

③ 友人関係を対人場面として取り上げている研究	黒田・桜井	2003	中学生の対人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム — ディストレス/ユーストレス生成モデルの検討 —	(項目中に「友達」, 「友だち」)
	黒田・有年・桜井	2004	大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係 — 相互強制的・相互独立的自己観を踏まえた検討 —	教示において、まず自分の親友を一人思い浮かべてもらい、続いて、自分の親友関係は、他の人々の親友関係と比べてどのようなだといえるか尋ねた。
	柴橋	2004	青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因	(面接の質問として「大切な友だちとは」, 「友だちとのつきあいで大切にしていること」, 「友だちと葛藤があったときの対処の仕方」); 中学, 高校時代のことを思い浮かべて回答するように求めた。教示文は「友人への自分の気持ちや考えを言うとき、…」(文章中に「友だち」); 「相手が同性の友だちのとき、あなたの気持ちは次の文章にどのくらいあてはまりますか」(項目中に「友だち」)
	外山	2004	中学生の学業成績と学業コンピテンスの関係に及ぼす友人の影響	クラスの中で、自分と最も仲の良い友人の名前を1名記述してもらった。本研究では、Guay et al. (1999b)の手続きに準拠し、自分が最も中の良いと指名した友人もまた自分を仲の良い友人として指名した生徒を“親密度の高い友人”を持つ条件、自分が指名した相手から自分が指名されなかった生徒を“親密度の低い友人”を持つ条件と設定した。
山岸	2004	女子青年がもつ現在の対人的枠組みと生育史に記述された母親及び友人との関係の質との関連	「自分にとってまわりの人(母親, 父親, 兄弟, 友人, 教師etc.) はどんな意味をもっていたか、誰が自分にとって重要だったか」	

を上述した。これらと先行研究との対応は、次のように考えられよう。①友人関係の様相やその発達の変化についての研究では、実際の心理的に重要な意味を持っていると考えられる友人関係の特徴を示していた。これは、精神的な安定化をもたらしてくれるような特別な友人の様相を探ったり、関係性の変化について検討していると考えられる。また、②友人関係が自己形成に与える影響や自己意識との関連についての研究では、友人が鏡となって自己理解が進むという意義と対応するだろう。③友人関係を対人場面として取り上げている研究では、対人葛藤での交渉など、友人とのやり取りの中で学ばれることについて扱われているといえ、人間関係を学ぶことと対応しているといえるだろう。

そこで、過渡期における友人関係の視点を検討するにあたって、まず過渡期における友人関係の意義を考えたい。学校組織を離れ、模索している青年は、社会に出て、目的集団・組織に就職などなんらかの形で所属している場合が多い。拘束される時間が圧倒的に多くなり、生活上の重要性は増すと考えられる。それまでの青年期では、自己開示、個人的な感情や考えの共有など内面的な特徴に注目して友人選択が行われ、相手の個人的なことをどのくらい知り理解しているかが親密性の指標(遠藤, 2000)とされてきた。しかし、目的集団・組織内での関係は、目的遂行が中心となる。青年期までにあった、親密さを中心とした関係とは異なるため、これまでのやり方だけで適応していくことが難しくなる可能性がある。そのような中で、状況が分かった上で話せる友人が目的

集団・組織の中にいることは、精神的なサポートはもちろん、目的遂行のためのサポートも得られる可能性があるだろう。つまり、過渡期における友人関係では、行動面の支えとなるという意義が強くなる可能性があるだろう。

それでは、このような意義に対応した研究の可能性は、どのようなものがあるだろうか。親密さを中心とした関係であれば、親密であるがゆえにサポートを受け取ることができた。一旦親友として関係が成り立つと、危機的な状況では、できるだけ精神的サポートを与えてくれるような存在であったといえよう。しかし、過渡期における関係の基礎となるのは、目的遂行であり、そこから生じるサポートは、あくまでも目的遂行のためのサポートである。たとえ親しくとも、目的遂行との兼ね合いで、切り捨てられる可能性があるような、いわば緊張の高い関係である。そのため、目的集団・組織内での友人関係においては、親密さと目的遂行とのバランスを取りながら関係を形成していくことが必要となると考えられる。つまり過渡期の友人関係、特に目的集団・組織内での社会的関係や、その関係をサポートしてくれるような人との関係を検討していくにあたり、親密さと目的遂行のバランスという視点から検討していく必要があるのではないだろうか。

ところで、目的集団・組織内での関係は、従来扱われてきた青年期には全く無いのだろうか。青年期には、親や家族とは異なる親密でインフォーマルな関係を形成する一方で、学校のクラブやサークル、地域の諸団体など

フォーマルな集団との関わりを自発的に形成していくようになる。これらの集団活動は、自らの興味や関心、価値観などの主体的な要因によって選択されるのが普通であり、共通の目的を実現させるべく、ともに語り合い協力し合っていく(宮下, 1995)。特に青年期後期になると、選択できる関係の幅が広がる場合が多い。また、青年期後期の友だちとのつきあい方で、目的に応じて相手を変えてつきあっている様子が報告されている(長沼・落合, 1998)。つまり、青年期、特に後期から徐々に目的集団・組織に加わるようになり、過渡期で新たな関係に適應しながら、成人期に入ると考えられるだろう。青年期後期から過渡期、つまり20歳代全体を視野に入れた検討が必要となるといえよう。

本稿では、青年期後期の延長について指摘し、後ろに延びた時期を過渡期と定義した。そして、その過渡期における友人関係を検討するための視点を探索することを目的とした。そのために、これまで行われてきた青年期の友人関係を概観し、どのような観点から検討されてきたか、どのような関係性を抽出しようとしてきたのかを整理した。それらを踏まえて、過渡期における友人関係の可能性を検討し、視点の提案を行った。今後青年期後期から過渡期を捉え、目的集団・組織における友人関係を、親密さと目的遂行とのバランスという視点から実証的に検討を進めていきたい。

## 引用文献

安達喜美子 1994 青年における意味ある他者の研究—とくに異性の友人(恋人)の意味を中心として— 青年心理学研究, 6, 19-28.

崔 京姫・新井邦次郎 1998 ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係 教育心理学研究, 46, 432-441.

遠藤公久 1997 II 交友関係(第7章 人間関係の変化) 加藤隆勝・高木秀明(編) 青年心理学概論 誠信書房 Pp 110-123.

遠藤由美 2000 青年の心理 ゆれ動く時代を生きる 梅本堯夫・大山 正(シリーズ監) コンパクト新心理学ライブラリ

榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の変化 教育心理学研究, 47, 180-190.

榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.

藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・

ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.

藤本浩一 1999 対人関係の発達(7.青年期). 山本利和(編) 発達心理学(現代心理学シリーズ7) 培風館 Pp.141-151.

藤野京子 2002 男子非行少年の交友関係の分析 教育心理学研究, 50, 403-411.

福岡欣治・橋本 幸 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, 43, 185-193.

福岡欣治・橋本 幸 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403-409.

Guay, F., Boivin, M., & Hodges, E. V. E. 1999b Social comparison processes and academic achievement: The dependence of the development of self-evaluations on friends' performance. *Journal of Educational Psychology*, 91, 564-568.

橋本 剛 2000 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究 48, 94-102.

日野林俊彦・南徹弘・糸魚川直祐 1998 女子初潮年齢の再低年齢化の続行について 日本心理学会第62回大会発表論文集, p.215.

平井美佳・高橋恵子 2003 友だち関係における文化—ジレンマ課題と友情概念の検討—, 心理学研究, 74, 327-335.

井上健治 1992 仲間と発達 東洋・繁多 進・田島信元(編) 発達心理学ハンドブック 福村出版 Pp.1048-1065.

乾 孝 1997 仲間づくりの心理学—友情成熟の家庭, 青年心理, 4, 17-26.

石川隆行・内山伊知郎 2002 青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連 発達心理学研究, 13, 12-19.

金子俊子 1995 青年期における他者との関係のしかたと自己同一性 発達心理学研究, 6, 41-47.

加藤隆勝 1997 「青年」の由来と青年期の位置づけ(第1章) 加藤隆勝・高木秀明(編) 青年心理学概論 誠信書房 Pp1-13.

黒田祐二・桜井茂男 2001 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係, 教育心理学研究, 49, 129-136.

黒田祐二・桜井茂男 2003 中学生の対人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム—ディストレス/ユーストレス生成モデルの



- 検討一, 教育心理学研究, 51, 86-95.
- 黒田祐二・有年恵一・桜井茂男 2004 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係—相互強調的-相互独立的自己観を踏まえた検討一, 教育心理学研究, 52, 24-32.
- 三浦正江・坂野雄二 1996 中学生における心理的ストレスの継時的変化 教育心理学研究, 44, 368-378.
- 宮下一博 1995 青年期の同世代関係(第6章) 落合良行・楠見孝(編) 講座生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し: 青年期 金子書房 Pp.155-184.
- 三好智子 2002 女子短大生の同性友人グループとの関わりにおける自己の個別性のあり方—イメージ画を用いた検討一 青年心理学研究, 14, 1-19.
- 水野将樹 2004 青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成一, 教育心理学研究, 52, 170-185.
- 長峰伸治 1999 青年の対人葛藤場面における交渉過程に関する研究—対人交渉方略モデルを用いた父子・母子・友人関係での検討一 教育心理学研究, 47, 218-228.
- 長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 長尾博 1997 前思春期女子のchum形成が自我発達に及ぼす影響—展望法と回顧法を用いて— 教育心理学研究, 45, 203-212.
- 西平直喜 1988 友情・恋愛の探求 大日本図書
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田努 1993a 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係, 発達心理学研究, 4, 162-170.
- 岡田努 1993b 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田努 1999 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 岡本清孝・上地安昭 1999 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, 47, 248-258.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴— 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 斎藤耕二・菊池章夫 1990 社会化の心理学/ハンドブック 川島書店
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 柴橋祐子 2001 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.
- 柴橋祐子 2004 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因, 教育心理学研究, 52, 12-23.
- 高木秀明 1996 仲間関係と青年 久世敏雄編著 青年心理学その変容と多様な発達の軌跡 放送大学教育振興会 Pp.46-56/74-81.
- 外山美樹 2004 中学生の学業成績と学業コンピテンスの関係に及ぼす友人の影響, 心理学研究, 75, 246-253.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離, 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 浦上昌則・小平英志 2004 子どもからおとなへの移行についての探索的研究—子ども, おとなを判断する次元の探索— 『アカデミア』人文・社会科学編, 78, 333-350.
- 和田実 1996 同性の友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, 67, 232-237.
- 和田実 2001 性, 物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究, 72, 186-194.
- 山岸明子 2004 女子青年がもつ現在の対人的枠組みと生育史に記述された母親及び友人との関係の質との関連 発達心理学研究, 15, 195-206.
- 吉岡和子 2001 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30.

(2004年9月30日 受稿)

## ABSTRACT

### A review of researches on adolescent friendships in Japan

Kumiko NANBA

This study is about friendships in late adolescence. It was pointed out that the adolescent period was getting longer than the past and it included about twenty years today. The extended years was named a transitional period from adolescence to adulthood. For the sake of proposing another point of view of friendships in the transitional period, descriptions in textbooks of some developing psychology and adolescent psychology are summarized at the start. There are many descriptions about best friends and their meanings for adolescents. Second, papers in four psychological journals that are included words, 'friend(s)' and 'friendship(s),' are collected and the papers divided into three classes by their contents. Thirdly, instructions that specified friendships in the methods of the papers are collected. The varieties of friends or the aspects of friendships dealing in the past studies were put in order. They were corresponded to the meanings of best friends in adolescence. Finally, another aspect for investigating the friendships in the transitional period was suggested. It was concerned with social relationships.

Key words: friendship, late adolescence, transitional period